



絵画の中のギリシア神話

Γρεεκ Μυθολογυ ιν τηε Μαστερπιεχε







ヨハネス・フェルメール
油彩・カンヴァス、97.8×104.6cm
1655-1656年頃

アルテミスの話

アルテミスの話

ディアナはローマ神話の女神ですが、後にギリシア神話の女神アルテミスに統一されていますので、同一の女神と考えて差し支えないかと思います。

アルテミスはアポロンという男神と双子の姉弟(アルテミスがお姉さんです)で、父親は大神ゼウス、母親はレートーというのが一般的です。また、アポロンは太陽の神、アルテミスは月の神といかにも双子らしい役割を担っています。2神ともオリュンポス12神(ギリシア神話の主要な神様12柱)に名を連ねています。

アルテミスは慈悲深い女神ですが、厳しい面も持っています。また、アルテミスはやはり月の女神のセレネやヘカテという女神、ニンフのカリストーとも同一視されることがあります。例えば「エンデュミオン」の話ではセレネではなくアルテミスが接吻しているという記述が見られます。

個人的にはアルテミスは厳格な処女神、という印象がありますので、例え接吻といえどそのような行為は行わなかったと思っています(オリオンの話もありますが、あれも恋心を持ったぐらいならいいのかなあ、と。でもその時点でアフロディテ(有名な名前では「ヴィーナス」です)に負けちゃいそうですが.....)。

アルテミスはお供のニンフを引き連れ、男性的な狩りをしているイメージがあります。しかし、何故か絵画では処女神なのに「サービスショット(?)」が多いような気がします。狩りの後の休憩や水浴のシーンが多く、アルテミスとしては「女神の役割としては、そっちじゃないだろ」と怒られそうですね。

この絵画は青字部分を描いた物と思います。カタログには、

いかなる場面が描かれているのか、はっきり判別もできない。一方、リートケの主張するところによれば、ここには、オウィディウスの『変身物語』中の挿話(2:442-65)、つまり「狩りに疲れきって、太陽のすさまじい熱さにやられた」ディアナと侍女の狩人が、休息を取って、衣服を脱ぎ、小川で沐浴しようという瞬間が描写されているという(Liedtke 2000,pp. 192-193;2001,cat. 64)。しかし、それは、1人の乙女、カリストが、自分の妊娠が発見されることを恐れ、服を脱がぬことの原因を探しながら、「伏し目がちに」沐浴を断る瞬間でもある。リートケは、右奥に立ち、服を着たまま、両手をお腹の前でしっかり握る女性がカリストだとした(カタログp168 抜粋)。

とあります。柔らかい感じの絵画だなと思っていましたが、もしカリストの話だとするとイメージが一変しますね。

カリストは処女神アルテミスに仕えるアルカディア王の娘またはニンフなのですが、大神ゼウ

スが彼女を汚してしまいました(カリストという名前は「最も美しい」というカリステから派生したらしいので、まあ女好き(?)なゼウスなら目を付けるでしょう)。この後、カタログにあるようにアルテミス(ディアナ)に妊娠を気づかれ、追放されてしまいます。

その後、ゼウスの正妻ヘラに姿を熊に変えられてしまい(心は変わらず)、森の中で偶然出会った成長した息子のアルカスに殺されそうになりますが、流石に罪の意識があったのか、汚した張本人ゼウスに救われ、息子と共に星座となりました(大熊座と小熊座)。

ところが、正妻のヘラにはこれが気に入りません。浮気相手が助けられ、しかも天上で輝いていたら、まあ確かに気分は悪いでしょう。

ヘラはオケアノスとテテュス(この夫婦の神は、ホメロス 著／松平千秋 訳 「イリアス(下)」(岩波文庫)の第十四歌 ゼウス騙し(五二二行) にあるようにヘラの育ての親っぽい所があります)に、この星座が聖なる海に浸からないように頼んだ為、北極星の回りを海に浸からず回り続けるようになりました。

カリストさん、美貌だったばかりに踏んだり蹴ったりですよ。それにしても大神ゼウスの浮気はどうにかならないものですかね……。